

「誰が名付けた番匠川と。」

中 林 幸 夫

(会員・香川県国分寺町)

川の名前には一般的に、堅田川・木立川等と、流れる地域の名前が付けられたものが多い。

佐伯市を流れる清流、番匠川は地域名と関係なく、「番匠川」の名の起りは、川のほとりに番匠が住んでいたのが由来のように伝えられ、書物等にも記載されている。

それでは、どの辺に番匠が住んでいたのかと考えて調べてみるが、それに関係するような地名も形跡も認められないし、古代、この地方に番匠の集団が必要であったのだからかと疑問を抱く。

番匠の集団が必要であったとすれば、それに見合う建築物等の痕跡があってもよいように思う。

番匠ということについて辞書等を調べると番上の工匠

の意味で、古代、交替で都に上り木工寮で労務に服した木工(大工)をいうとある。

古く律令制では、木工寮、または、太宰府に属した工人の長を大工と呼ぶとも解説されその下に小工(小だくみ)がいたとある。



至徳1年(塗384)に京都三聖寺の惣大工だった行次が四男の行家に6ヶ寺の大工職を譲る旨を記した文書。

後には、壁大工、檜皮大工、瓦大工と呼ばれる者もあり、最高の建築技術者を大工（番匠）と呼んでいたようである。

本当に番匠川のほとりに番匠の集団が住んでいたとすれば歴史的に興味ある問題である。

聖武天皇の天平十三年（七四一年）、全国に国分寺・国分尼寺、天平十五年（七四三年）に大仏建立の詔が出されて、日本に於いても本格的な社寺の建設がはじめられたこと等を考え併せると佐伯地方には、そのような遺跡が、まだ発見されていないが、番匠がいたとすれば、遺跡が発見されるかもしれない。

国分寺創建時代頃に、瓦を焼いて、それを葺く建造物は、朝鮮百濟、新羅系の渡来人によって導入され、日本書紀の崇徳天皇元年（五八八年）の条に、百濟から渡来した瓦博士が、山城、摂津の国境付近で瓦の製造に関与したのが、我が国に於ける瓦のはじまりと云われている。

瓦の言源は、梵語のKAPALAからとのことで仏教文化の中で生まれたものである。

古代瓦は、製作時につけられた布目が残されており、製作年代を示している。

このような瓦は、布目瓦と呼ばれ、鎌倉時代までのものに布目を見ることができるとされる。

布目は、瓦や陶器を作る場合、ぬれ布で押さえたあととされ、布目瓦の場合は、瓦を作るとき、瓦型の上に布を敷いたための跡といわれている。

私も国分寺や古い遺跡で布目瓦の破片を拾い集めて持っているが、どの瓦にも古代の躰をしのぶ布目が残されており、使用された布の糸は太いもので織られている。

この布目を見ていると、当時の布の織り方や衣服の布のことまで連想させられる。

当時、焼かれた瓦は、丸瓦、平瓦、軒丸瓦、鬼瓦、等で布目は平瓦に多く見られる。

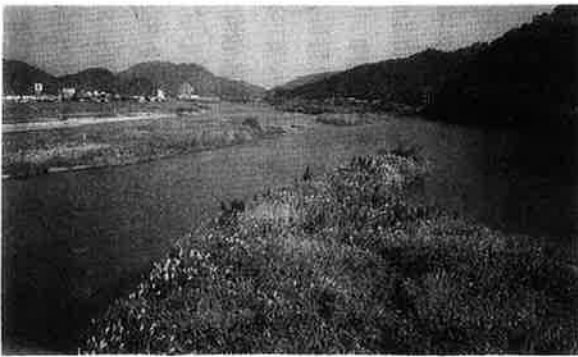
布目瓦は、素焼色をした赤茶色のものや、白っぽいもの、油煙で灰色になったもの等、様々であるが、わら屋根、檜皮屋根に住んでいた人々にとっては、瓦屋根は驚異的な文化であったことだろう。

しかし、一枚一枚、人の手によって作られ焼かれた瓦が、一つの寺院を葺くためには、何千、何万枚も必要で、その苦勞のほどがうかがわれる。

話は番匠から大きくそれたが、番匠川周辺から、布目



城山から望む番匠川



樫野橋から下流を見る

瓦の一片でも出土すれば、古代、番匠のいた証明になるのではなからうか。

番匠川と云う名前がいつ頃から使われたか知りたくて
図書館で調べたところ

大分県郷土史料集成

佐伯史

に次のような記事があった。

大分県郷土史料集成（地誌篇）中の

「豊後国古城蹟并海陸路程」の中の

「毛利市三郎領分」の項目の中に

古市、田市村古城（梅牟礼城のこと）

一、古市郷之内、田市村に古城跡之山有。

坂之内三町二〇間。（約三六三米）

木戸口卯之方に有。（卯＝東南東に城の入口がある）

小柴山上之場之広さ、北南三〇間（五四米）西東二十一間。（三八米）

南北尾続也。

山之上に水なし。谷に水有。

城下より陸路三十町（三二七〇米）

但し、田市村から末（南西）之方は、

中川内膳正領分。

みあかり村堺め迄五里。（二〇キロ米）

牛馬之通ひ吉。

此間に、ばんぜう川之瀬、広さ四十間（七二米）深さ二尺（六十センチ）

其外溝川之瀬五瀬有。

佐伯史（大正三年発行）記事に

明治十二年二月六日、大分県知事の諮問に対し、本郡々長より答へたる大要左の如し（明治十一年十二月二一日、本県知事は、庶達第一〇二号を以て、郡誌編輯の資料に充るため管内各郡長に命じ、該郡内の状況を調査し上申すべき旨を達したり）

土地の形勢の項に

番匠、久留須、井崎、堅田等の諸川あり、その中、番匠川、最も長大なり

其源は本郡、山部村の山間に発し、佐伯村を経て海に入る。

地勢の項に

・・・河川の長大なるは、番匠川を以って巨擘とす。

源を因尾村の山間に発し、横川、尺間、床木等の諸川を合せ東行、佐伯城市の南を過ぎ、大江灘に至り海に入る。

其の流域十五里余あり、

之に次ぐを堅田川とす。」

「毛利市三郎領分」との記載から、豊臣・徳川時代には

すでに番匠川と呼ばれていたようで、「此間に、ばんぜう川の瀬、広さ四十間、深さ二尺」から想像すると、当時は瀬との表現から自然に流れるままの川で、堤防は完全なものでなく、現在の番匠大橋付近の川幅は、七二米、深さ六〇センチの水流がゆるやかに葦の中を流れていたのだろう。

「朝日百科、日本の歴史別冊」（平成六年八月発行）

に掲載されている、番匠に関する古文書や記事等を見ると「番匠」（大工職）は本来、寺社から任命される役職とのことで、古文書の年号が至徳元年（一三八四年）であることから、番匠という呼称は、十―十五世紀頃に使用されていたと思われる。

それでは、その頃、佐伯地方で番匠を任命するような寺社があったのだろうか。

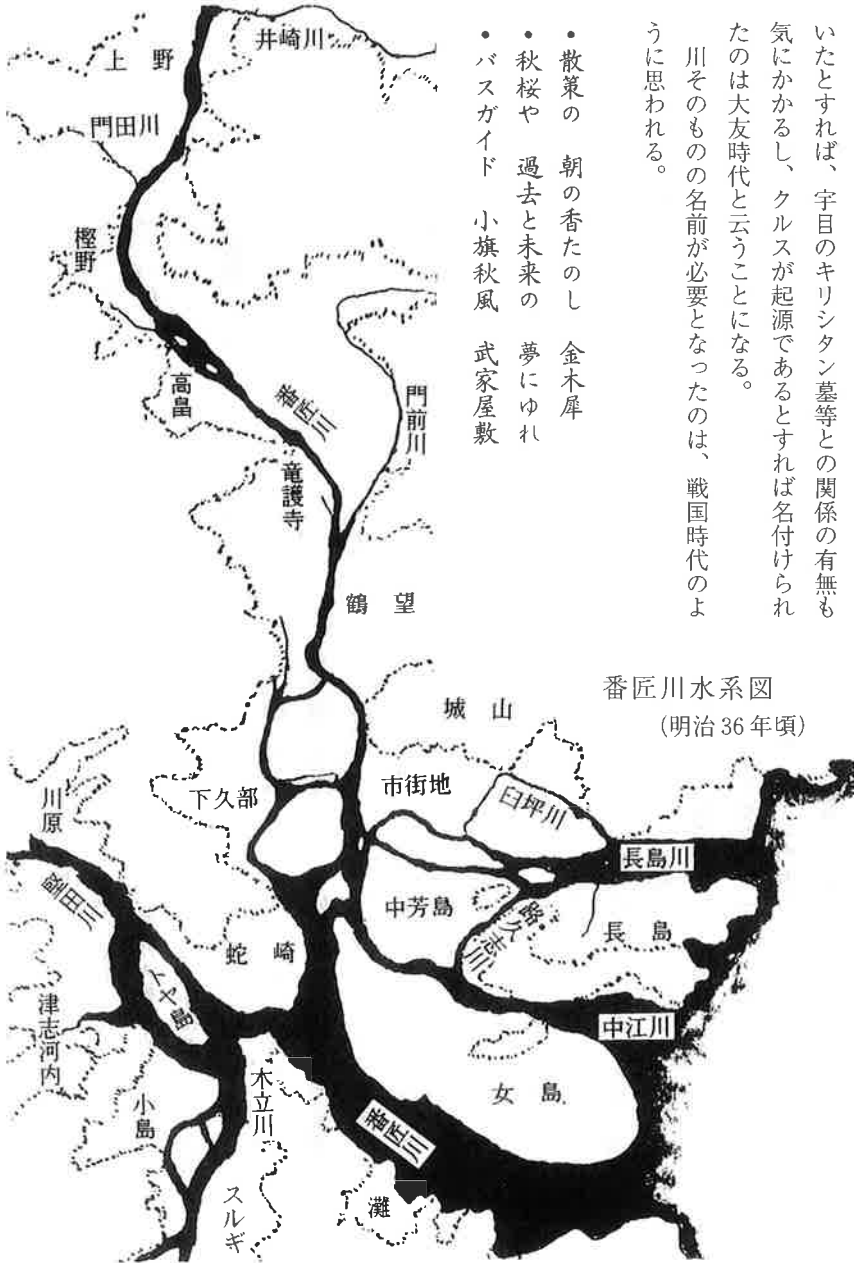
毛利高政入封以前に存在した寺といえは、古市にあった善教寺及び十三重塔にまつわる寺と考えられるが、礎石や瓦片が発見されないのは何故だろうか。

また、佐伯史記事の中に、「番匠、久留須、井崎、堅田等の諸川」からの中の久留須川は、宇目、直川方面からの流れで、番匠と同じく川のほとりにクルスが住んで

いたとすれば、宇目のキリシタン墓等との関係の有無も
 気にかかるし、クルスが起源であるとすれば名付けられ
 たのは大友時代と云うことになる。

川そのものの名前が必要となったのは、戦国時代のよ
 うに思われる。

- 散策の 朝の香たのし 金木犀
- 秋桜や 過去と未来の 夢にゆれ
- バスガイド 小旗秋風 武家屋敷



番匠川水系図
 (明治36年頃)